

潰瘍形成という急性の症状を呈した。このことより、同じ口腔粘膜の接触性アレルギーでも、種々の臨症像を呈する場合があることが示唆された。

38. 北海道南西沖地震被災者への歯科の救援活動 —義歯紛失者への補綴診療活動から—

平井 敏博, 石島 勉, 越野 寿
池田 和博, 小西 洋次, 昆 邦彦
広瀬 哲也, 金子 寛, 雪野英一郎
家城 信良, 植木 和宏, 岡部 靖
橋川 美子, 長尾 浩美, 市岡 典篤
佐々木隆二, 大友 康資, 青木 聡
笠嶋 茂樹, 横山 雄一, 久保田博信
佐藤 由蔵, 寺澤 秀朗, 本間 宏典
村井 一仁, 山田 一晴
(歯科補綴学第一)

【目的】 平成5年7月12日に発生した北海道南西沖地震は、広域にわたり、大きな被害をもたらし、特に、奥尻町では、多くの島民が地震直後に襲った津波と火災により義歯を紛失したため、不自由な食生活を余儀なくされた。これに対し、本学は診療班を組織・派遣し、義歯を紛失した被災者に対する歯科救援活動にあたり、96床の義歯を製作・装着した。この歯科救援活動に際して、アンケート調査を行い、災害時の歯科の問題点や、歯科救援活動のあり方について検討した。

【対象および方法】 歯科診療班が義歯を製作・装着した男性20名、女性33名の計53名（平均年齢62.9歳）を対象として、まず、地震発生から11日後の義歯製作開始時に、義歯の紛失状況、義歯紛失に気付いたきっかけ、義歯紛失によって支障をきたした点、緊急援助食料の利用状況、および食事の摂取状況などについて調査した。また、新義歯を装着した53名中、装着3か月後に経過観察を行えた43名を対象に、新義歯の使用状況および使用感、新義歯装着によって改善された点および不快事項、

ならびに今回の補綴治療に対する感想などについて調査した。

【結果および考察】

1) 義歯を紛失した被災者の大部分は、食生活を中心とした日常生活に支障をきたしていたことが明らかになった。

2) 緊急援助食料のメニューや調理法に関して、義歯紛失者や義歯装着者に対する配慮が不十分であったことが示された。

3) 災害発生時の医療活動には歯科医師の参加が不可欠であり、とくに、義歯紛失者に対して、義歯の製作・装着を含めた歯科救援活動が行えるような体制の整備が必要であることが示唆された。

4) 今回の診療班により製作・装着した義歯の予後は概ね良好であったが、一部不良なものも認められ、義歯調整のための診療員の派遣を考慮すべきであったことが示された。

39. 本学臨床実習生における二等分法撮影の失敗頻度の評価

北 千景, 大西 隆, 市岡 智子
金子 昌幸

今日の歯科診療において、X線写真は欠くことのできない重要な診断情報源となっている。より正確な情報を得るためには、正しい撮影方法を習得する必要がある、

特に利用頻度の高い口内法デンタル撮影法は、歯科医師が確実に身につけていなければならない技術であると言える。放射線科では、臨床実習の一貫として、全顎口腔

内X線写真撮影の実習を行なっている。そこで今回われわれは、臨床実習生の口腔内X線写真撮影における失敗の傾向を知るとともに、今後の実習の指針とすることを目的として、撮影の失敗頻度を客観的に評価し検討した。

放射線科で行なった、学生間相互で撮影した10枚法口腔内X線写真から抽出した合計1030例（総計1030枚）を対象として失敗の評価項目に従って分類した。

評価の結果、何らかの失敗が認められた写真は約60%であった。項目別では垂直的角度フィルムの位置、水平的角度の順が多かった。撮影部位別では、下顎両側小白歯部が約80%と最も多かった。失敗項目別では、垂直的

角度の不良は下顎左右小白歯部に多く、水平的角度の不良は上顎、特に左右小白歯部に多く認められた。フィルムの位置付けは、下顎小白歯部に多く、コーンカットとフィルムの裏返しは少なかった。実習生一人当たりの失敗枚数は1～9枚で平均5.4枚であった。

本調査から撮影部位によって失敗頻度にはっきりとした差があり、原因にも明確な傾向が認められた。再撮影枚数の減少は、不当な患者被曝を避けるうえでも重要であることから、今後は評価結果を踏まえて、限られた実習時間内で成果をあげられるよう指導することが課題であると思われる。

40. 歯科保存修復学基礎実習における項目別窩洞形成評価

—第1報 学生自身による窩洞の自己評価—

横内 厚雄, 畑 良明, 川上 智史
原口 克博, 宮田 武彦, 飯岡 淳子
大沼 修一, 尾立 達治, 長岡 央
野田 晃宏, 豊岡 広起, 平本 正樹
荊木 裕司, 松田 浩一

(歯科保存学第二)

歯科大学において、学生は基礎実習に入る前にあらかじめ基礎歯学および臨床歯学の講義によって実習に関する基礎的知識を得る。

さらに実習中における指導教員によるデモンストレーション、アドバイス、形成された模範模型などにより知識と情報を得ている。

しかし、指導する側からすると、これらの知識や情報が学生にどれだけ理解されているかを把握することは困難である。

今回我々は、基礎実習における教育効果を向上させるため、上顎右側第1大臼歯に2級スライス型インレー窩洞を形成させ、井上らの自己評価表を参考に作成した項目別評価表に従って、教員の説明を受けながら自己評価を行い、同時に教員も学生の作品に対して同様の評価を行った。そこで、指導教員との評価の違いを明らかにするとともに、前期実習時における達成度と後期実習時における達成度との比較を行ったところ以下の結論を得

た。

1. 項目別窩洞判定において教員、学生間の窩洞そのものに対する認識に大きな差は認められなかった。
2. 裂溝に関して過度に追求する傾向が存在したが、後期実習では改善の兆しが見られた。
3. スライス面に関しては、近心咬頭を過度に切削する傾向があった。
4. 凸隅角部の整理、窩壁の滑沢度に対して、低い評価を学生自身が下した。
5. 後期実習において学生は、ほぼ全ての項目で上達したと自己評価した。
6. 項目別窩洞評価法は、学生が自分の窩洞形成に対し正しく評価して技術を上達させるのに有効な手段であると考えられる。

今後は、全ての実習課題においても自己評価法を用いて教育の効果を挙げて行きたいと考えている。